

速度とリズムから感じるものを言葉で伝え合いながら歌唱表現を深めていく子ども

— 中学2年「歌唱表現を深めよう～音楽的な感受から～」の実践から —

1 題材のねらい

音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受することによって歌唱表現を深めることができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

本校の生徒たちは、音楽の学習に対する意欲が高く、前向きに取り組もうとする生徒が多い。歌唱活動では、積極的にのびのびと声を出そうとする生徒が男子に多く、毎年秋に開催する校内音楽会（校内合唱コンクール）に向けての活動でも、男子の歌声が学級全体を引っ張ることが多い。本校の生徒たちは、この校内音楽会に対する関心と意欲がとても高く、上学年の歌声にあこがれと理想を抱いて取り組んでいる。また、日頃から昼休みや放課後にコーラス部の歌声を耳にする機会が多く、合唱における発声（音色）のイメージを多くの生徒たちがもっている。しかし、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚したり、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ったりし、それを歌唱表現に生かす力のある生徒はまだ少ない。

校内音楽会における第2学年の課題曲は、混声三部合唱曲『心の中にきらめいて』（田崎はるか作詞／橋本祥路作曲）であった。この曲は全体的に落ち着いたテンポで、最初男女のユニゾンから始まり、混声三部へと発展し、Codaの6小節間は、男声も2声に分かれ混声四部合唱の形態になる。各パートの音域・音程も難しくなく、混声のハーモニーを感じ合える曲である。音程が取れはじめ、楽曲全体の流れを感じはじめると、のびのびと歌おうとする姿が多く見られるようになった。しかし、『心の中にきらめいて』の途中、ベートーヴェン作曲のピアノソナタ第8番『悲愴』第2楽章冒頭の旋律が引用されている部分とそれ以外の部分の雰囲気の違いを感じ取って、自分たちで歌い方を工夫しようとする力はまだまだ弱かった。

(2) 本題材の内容と音楽科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本学校園音楽科では、音楽的な感受をもとに、よりよい音楽表現を求めて思考・判断・表現を繰り返すことでより高い段階へと発展していく学習プロセスをベースにして取り組んでいる。

歌唱表現を深めるためには、歌唱技術の向上が不可欠ではあるが、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受することにより、自分の思いやイメージをもたせることが大切である。本題材では、音楽を形づくっている要素から速度とリズムの2点に焦点を当て、この2点の感受からイメージをふくらませたり、音楽表現を工夫させたりしながら思考力から表現力への行き来をうながしたい。鑑賞教材として『ハンガリー舞曲第5番』（J. ブラムス作曲）と『チャルダッシュ』（V. モンティ作曲）を扱い、歌唱教材として『花の季節』（英龍明子日本語詞／B. フォミーニ作曲／佐井孝彰編曲）を扱うことにした。

『花の季節』は、前半のAdagioのゆったりとした部分と、後半のAllegrettoの速い二つの部分で構成されている。また、ただ速度が変化するだけでなく、伴奏の形や歌詞の内容などから前半はしつとりと、後半は明るく快活な雰囲気を感じ取ることができる。ロマ音楽の特徴である速度と伴奏リズムの変化は、生徒の音楽的な感受を深め、歌唱表現をより深めていくであろうと期待した。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

① 速度とリズムの特徴や違いを感じ取ることができるために

速度とリズムの特徴や違いを感じ取ることができるためには、聴き比べをし、感じ取ったことを言葉で伝え合い、意見を共有することが大切である。

そこで、速度と伴奏のリズムの変化による表現の違いや表現の幅の広さが生まれてくることを感じ取ることができるように、導入として『ハンガリー舞曲第5番』と『チャルダッシュ』の演奏を聴き比べる場を設定した。

② 学び合いが深まるための場面の設定

速度とリズムの特徴や違いについて感じ取ったことを歌唱表現に結びつけていくためには、一人一人が自分の思いをもち、それらを言葉で伝え合い、そして求める表現に向かって繰り返し歌える場を設定することが大切である。

そこで、第2次での学習形態は、生徒たちの話し合いにより編成した二つのグループ（17人ずつ）で行う。各グループは、「しっかり歌える生徒」「歌声のボリュームは大きくないが、音楽に高い興味・関心をもっている生徒」「発言を活発に行う生徒」「ピアノを弾くことができる生徒」がバランスよくなるように編成した。また、グループには、ピアノ伴奏を弾く生徒と指揮を振る生徒を1名ずつ決めるようにし、指揮を振る生徒は、そのグループのリーダーとして、グループ内の意見をまとめるようにした。

第2時では、『花の季節』の音取りをしたのち、2拍子と4拍子の基本的な指揮の振り方を練習し、CD演奏に合わせて指揮を振ることにより、前半と後半の速度とリズム感の違いを感じ取り、グループでの速度の工夫につなげるようにした。

第3時では、『花の季節』の前半と後半のピアノ伴奏のリズムの違いによる雰囲気の違いを感じ取り、前半と後半の「歌い方」の追求へと展開していく。歌唱のための基礎練習を行ったのち、前時に工夫した速度を意識させながらグループ演奏を設定する。そして、事前に全校生徒を対象に行った『「歌い方」いろいろ・・・』アンケートの集計（図1）を示し、「歌い方」を追求することがめあてであることを伝える。このアンケートは、生徒の「歌い方」への意識を高めるためにとったものである。

～「歌い方」いろいろ・・・～	
2年生アンケートより (2012年9月実施)	
【あ行】	哀愁ただよう感じで歌う 曖昧に歌う 明るく歌う 怪しく歌う
勢よく歌う	いとそくに歌う 訴えるように歌う うれしそくに歌う おおらかに歌う
恐ろしい感じに歌う	穏やかに歌う 落ち着いた感じで歌う 重く歌う
【か行】	語りかけるように歌う 哀しそくに歌う 悲しそくに歌う 軽やかに歌う
厳しく歌う	希望に満ちた感じで歌う 清らかに歌う キラキラした感じで歌う
綺麗に歌う	暗く歌う 苦しそくに歌う 軽快に歌う 豪快に歌う 悔しそくに歌う
【さ行】	叫ぶように歌う ささやくように歌う 寂しそくに歌う さわやかな感じに歌う
鋭く歌う	自然な感じに歌う 静かに歌う しっかりと歌う しぶく歌う しみじみと歌う
しめっぽく歌う	シャウトして歌う 情熱的に歌う しんみり歌う 盛大な感じに歌う

図1:「歌い方いろいろ・・・」アンケートから

次に前半と後半のピアノ伴奏のリズムの違いに着目できるように、後半のピアノ伴奏を前半と同じ形で弾いて歌唱し、前半と同じ形の伴奏では、速い速度感が出にくいことに気付くことができるようにした。また、後半のピアノ伴奏をアルペジオの形で弾いて歌唱し、さらに速度と伴奏の形をいろいろ組み合わせて歌唱し、感じ方の違いを何人かが発表する。そして、グループに分かれ、前半と後半の「歌い方」を追求する。その際、『「歌い方」いろいろ・・・』アンケートの用語を参考に、実際にいろいろ歌って試しながら、そこで各自が感じたことをグループ内で伝え合うことを大切にできるようにしたい。楽譜にはすでに速度と強弱記号が記載してあり、そのままの指示通り演奏することでもある程度の演奏はできるであろうが、ただ「速い」「遅い」「小さい」「大きい」という単純な変化だけでなく、「滑らかな歌い方」や「明るくはっきりとした歌い方」などの「歌い方」を追求させることが、より歌唱表現の深まりにつな

がるのではないかと考えた。さらに、例えば「滑らかな歌い方」とした場合、雰囲気などから「どれくらいの滑らかさなのか」という度合いを吟味できるようながすことが大切と考えた。グループ内においてお互いに思いや意図をしっかりと伝え合えるように言葉かけをし、さらに生徒同士の発言をつなげ、思いを深められるような教師の言葉かけを大切にしたいと考えた。その場合にも、言葉だけのやりとりにならないよう、実際に歌いながらいろいろ試すよう声がけをし、時には教師も一緒に声を出しながら表現を引き出すようにしていきたい。グループの意見は拡大楽譜に記号や言葉で書き込むようにし、視覚的にもとらえやすいようにしていった。グループ発表（演奏）では、拡大楽譜をもとに歌い方の工夫を説明したのち演奏させ、聴く側は、授業冒頭の演奏と今の演奏をお互いに比較しながら聴くようにながし、ワークシートに感じたことを記述できるようにした。

3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	演奏を聴き比べ、表現の違いや表現の幅広さを感じ取ろう。	1	<ul style="list-style-type: none"> ・『ハンガリー舞曲第5番』（J.ブラームス作曲）『チャルダッシュ』（V.モンティ作曲）の曲を聴き比べ、速度と伴奏のリズムの変化による表現の違いや表現の幅広さを感じ取る。 ・「ロマ音楽」の特徴について知る。
2	速度とピアノ伴奏のリズムに対する感じ方を伝え合いながら「歌い方」を追求しよう。	2	<ul style="list-style-type: none"> ・『花の季節』の音取りをする。 ・2拍子の指揮を練習し、『花の季節』の前半と後半での速度とリズム感の違いを指揮を振ることで体感する。 ・前半と後半の曲想に合う指揮の振り方を探る。（個） ・グループで速度の工夫をする。（グループ）
		3	<ul style="list-style-type: none"> ・前半と後半のピアノ伴奏のリズムの違いによる雰囲気の違いを感じ取る。（全体） ◇前半・後半の曲想に合う「歌い方」を探る。（グループ） ◇グループごとに追求した「歌い方」を伝え合う。（グループ→全体）

4 授業の実際

(1) 『ハンガリー舞曲第5番』と『チャルダッシュ』の演奏を聴き、速度とリズムの特徴や違いを感じ取る（第1時）

本題材の導入は、『ハンガリー舞曲第5番』と『チャルダッシュ』の鑑賞を行った。それぞれの曲の速度と伴奏のリズムに着目して聴き、それぞれの特徴とさらに二つの曲で共通点を挙げていった（表1）。

表1：二つの曲の特徴と共通点

	ハンガリー舞曲第5番 【ヨハネス・ブラームス（ドイツ）作曲】	チャルダッシュ 【ヴィットーリオ・モンティ（イタリア）作曲】
速度に着目！その特徴は？	<ul style="list-style-type: none"> ・速さに緩急がある。 ・急に速くなったり、遅くなったりする。 ・速度の変化がはっきりしている。 ・速いところはだんだん速くなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・速いときと遅いときの差が大きい。 ・あまりきまりがない感じの速さ。 ・ゆっくりしていたのが、ちょっと間があってから速くなる。

<p>伴奏リズムに着目！その特徴は？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・強くなったり、弱くなったり。 ・速くなったり、遅くなったりする。 ・リズムにあまり変化はない。ずっとブンチャツ、ブンチャツ。 ・常に同じリズムで動いている。 ・リズムが一定ではない。縦と横。 	<ul style="list-style-type: none"> ・メロディに合わせている感じ。 ・速いときは縦に、遅いときは横に。 ・滑らかなリズムと激しいリズムがある。 ・最初は悲しい感じだったけど、リズムが速くなったところは悲しい中にも明るさがあった。
<p>二つの曲で共通していることは？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・速いのと遅いのが極端。速度がきっぱりしている。 ・何回も速さが変化していて、自由な感じ。伴奏の感じとメロディが合っている。 ・曲の雰囲気之急に変わる。 ・縦に刻む音楽と横に流れる音楽があった。 ・速さとリズムが変わると強弱も変わる。 	

速度については、どちらの曲とも速度の変化がはっきりしているので、「速さに緩急」「速くなったり、遅くなったり」のような表現でその変化を素直に知覚できた生徒がほとんどであった。伴奏のリズムについては、「滑らかなリズムと激しいリズム」や「悲しい中にも明るさがあった」などのように、リズムの違いによる雰囲気の違いを感受して言葉で表現している生徒が多かったが、「ブンチャツ、ブンチャツ」の表現のように、リズムそのものの形の違いに気付く生徒は少なかった。

この時間の最後に、次回からの学習は二つのグループで追求していくことを説明し、各グループには、「しっかり歌える生徒」「歌声のボリュームは大きくないが、音楽に高い興味・関心をもっている生徒」「発言を活発に行う生徒」「ピアノを弾くことができる生徒」がバランスよくいるように、自分たちでグループ編成をするようにした。校内音楽会の取組でのパート練習や全体練習を通して、上記のような条件について、生徒同士がすでに分かっている面があり、生徒自身の話し合いによって編成することが、校内音楽会の取組を通して学んだことをいかすことになると考えたからである。この場面では、教師の期待通り、短時間でバランスを考えた2グループを編成することができた。

(2)『花の季節』の前半と後半の速度の違いを感じ取り、グループで速度を工夫する（第2時）

第2時では、まず全体で2拍子と4拍子の基本的な指揮の振り方を練習したのち、『花の季節』のCD演奏に合わせて指揮を振ることにより、前半と後半の速度の違いとリズム感の違いを感じ取ることができるようにした。

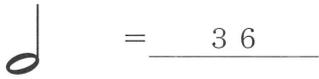
【指揮を振って感じたこと】

- ・途中でテンポが変化するところが難しかった。
- ・いろいろなことを考えながら振らないといけないので難しかった。
- ・前半はゆっくりで柔らかい感じ。後半はけっこう速いので鋭い感じ。
- ・キレが必要なときと優雅にするときがある。
- ・前半は柔らかく振らないといけない。後半ははっきり振らないといけない。
- ・テンポが全然違うことと、滑らかな部分とスタッカートの部分の差がわかった。
- ・前半は滑らかに流れるように、後半はちょっとスタッカート、跳ね回るノミみたいに。

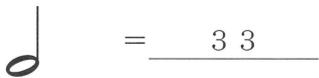
指揮を振ることに対する技術的な難しさに気を取られ、音楽的なことに対しての感じ方が薄い生徒が多かった。その中でも上記のように「柔らかく」「鋭く」「キレ」「優雅」「はっきり」「滑らか」「跳ね回る」のように指揮を振ったことで感じたことを言葉で表すことができた生徒がいた。

次にグループでの速度の工夫を行った。楽譜にはすでに速度記号 Adagio, Allegretto, Allegro が示してあるが、グループでいろいろな速度で歌って試しながら、自分たちが表現したい速度を絞っていった。その際に、漠然とした「これくらい」という速度感ではなく、メトロノームを使い、自分たちが演奏したい速度を数値化していった。

【A班の速度設定】

前半の速度	後半の速度
	 = $\frac{116}{360}$ (1回目)  = $\frac{138}{360}$ (2回目)  = $\frac{160}{360}$ (3回目)

【B班の速度設定】

前半の速度	後半の速度
	 = $\frac{132}{360}$ (1回目)  = $\frac{132}{360}$ (2回目)  = $\frac{132}{360}$ (3回目)

前半の速度は、どちらのグループともにほぼ同じ速度を設定したが、後半については、A班は3回の繰り返しの速度を変化させる（1回ずつ速くする）工夫を行った。どちらの班とも指揮者を中心にさまざまな速度で歌いながら速度を探っていく姿があった。しかし、なぜその速度なのかという根拠を話し合いながら設定するには及ばなかった。メトロノームで数字化したものの、結局は漠然とした速度感を数字で表したにとどまった。前段の指揮を振ることで前半と後半での速度の違いとリズム感の違いを感じ取ったことが、この場面にかき立てられることを期待していた。しかし、指揮を振ること自体の難しさにとどまってしまったために、速度設定の深まりには至らなかった。

(3)『花の季節』の前半と後半の伴奏のリズムの違いを感じ取り、グループで「歌い方」を追求する（第3時）

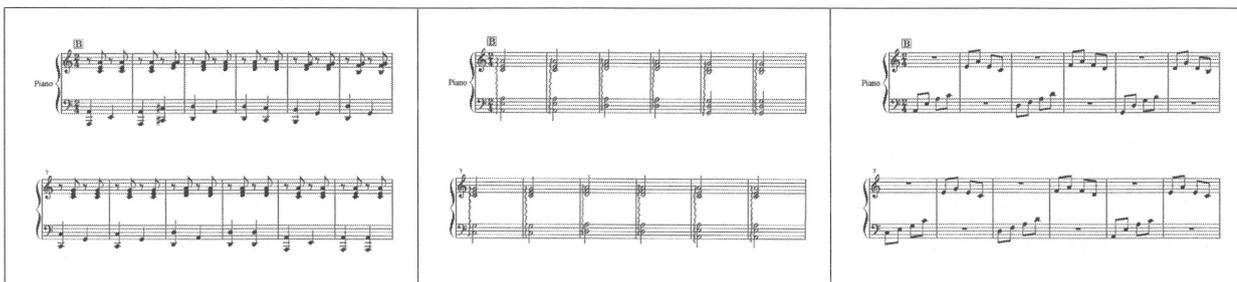
第3時では、めあてを「速度とピアノ伴奏のリズムを感じ取り、『歌い方』を追求しよう」とした。まず歌唱のための基礎練習を行ったのち、前時に工夫した速度を意識しながらグループ演奏（発表）を行った。演奏する前に速度を確認する指揮者の姿があり、自分たちで設定した速度を意識しながら演奏できた。

次に前半と後半のピアノ伴奏のリズムの違いに着目できるように、後半のピアノ伴奏を次の3通りの伴奏で教師が弾き、全体で歌い比べをした。

【伴奏1】

【伴奏2】

【伴奏3】



前半と同じ形の伴奏1では、速い速度感が出にくいことに気付くことができた。また、後半をアルペジオの形伴奏3で弾いて歌唱し、さらに速度と伴奏の形をいろいろ組み合わせて歌唱したところ、「同じところでも伴奏が変わると自然と弾んだ歌い方になったり、滑らかな歌い方になったりした。」などの感想が出た。伴奏の違いによって、歌い方の感じが違ってくることが実感することができた。

そして、グループに分かれ、前半と後半の「歌い方」を追求した。その際、事前に調査した『「歌い方」いろいろ…』アンケートの用語を示すことにより、感じた歌い方を言葉と結びつける手助けとなった。それを参考に実際にいろいろ歌って試しながら、各自が感じたことをグループ内で伝え合った(図2)。B班は、後半の部分に対して、「軽やかに歌う」という意見が出たが、「どうやったら軽やかになるか、具体的に分かん！」という声が挙がった。そこで、教師が「歌って試してみたら。」と声をかけると、同じところを繰り返し歌って試す姿が見られた。



図2

グループの意見を拡大楽譜に言葉で書き込ませ、視覚的にもとらえやすいようにした(図3)。グループ発表(演奏)では、指揮者が拡大楽譜をもとに歌い方の工夫を説明したのち演奏し、聴く側は、授業冒頭の演奏と今の演奏を比較しながら聴いた。



図3

【A班への感想】

・「さみしそうに」「しんみりと」を意識した前半と、「楽しそうに」「鋭く」歌っていた後半との差は、最初の演奏とは全然違っていたなと思いました。

【B班への感想】

・後半に入ったとき、楽しい感じを軽やかに歌って表現していた。男女が分かれるところは、最初の演奏では同じように歌っていたけど、今回はそれぞれ歌い方が違っていた。

5 成果と課題

本題材を通して生徒たちは、音楽的な感受をもとに、よりよい音楽表現を求める活動を繰り返すことで、速度と伴奏のリズムの違いから歌い方を探り、歌唱表現を深めていくことができた。その要因として、次の3点が挙げられる。1点目は、音楽を形づくっている要素を速度と伴奏のリズムに絞り、楽曲の全体を歌うことを通して、旋律の感じの違いを感じ取りながら、歌い方を見つけたことである。2点目は、音楽を形づくっている要素を生徒たち自身が知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取れる教材を選択し、聴き比べさせたことと、ピアノ伴奏の形を変えて歌い比べさせたことである。3点目は、学習形態を個→グループ→全体→グループ→全体と「行きつ戻りつ」したことで、自分や他の人の感じ方や意見に気付き、前半と後半を変化させて歌うおもしろさを生徒たち自身で見つけることができたことである。

また、学んだことをいかす場面では、グループによる歌唱練習において、教師は各グループを見てまわり、問い直したり、認めたりするはたらきかけを行うことで、生徒たちはグループの歌い方をつくりあげていった。グループ発表の場面では、他のグループの工夫した「歌い方」を発表することで、聴く側のポイントが明確になり、授業冒頭の演奏との違いに気付くことができた。

感じたことを言葉で伝え合い、試行錯誤しながら深め合う場面は見られたが、言葉で表現したことを歌唱表現に結びつける歌唱技術の面がまだまだ十分ではない。歌唱表現の深まりが見られるような技術面の習得と音や音楽を知覚し、感受する面の育成とのバランスが課題であるといえる。

(文責 小村 聡)